

## キェルケゴールとマックス・ピカート —不安と決断をめぐる考察—\*1

石井 亮治

### はじめに

美的、倫理的、宗教的という、キェルケゴールが提示した人間の三つの生き方は、彼の思索を特徴づける要素の一つとして広く知られている。しかしながら、こうした区分が意味するところは、読み手の抱える問題意識や解釈の仕方によって様々な形で理解されるため、その実とらえどころのないものであるとも言える。例えば、この三つの生き方をいわゆる「実存三段階」として理解し、その要点をごく簡単にまとめるならば、人間は美的なもの、感性的なものに目移りさせる低次の生き方から出発し、諸段階をめぐるながら、やがては神にまつわる逆説をも受け入れるような宗教的生き方へと至るのだということになる。しかしながら、人間が自らの生き方をまさに階段をのぼっていくように高めていく（あるいは飛躍させていく）のだという解釈の仕方は、ある程度説得的ではあるものの、どこか現実離れたものであるようにも思える。なるほど、そうした発展的な見方の根拠を、キェルケゴール自身がたどった生き方の変遷のうちに見出すことも出来るかも知れない。とはいえ、その場合も疑問点は残る。こうした生き方がキェルケゴール自身の経験と密接に結びついたうえで描写されているのだとすれば、「信仰」や「神」という言葉がリアリティーを失いつつある時代に身を置く我々が彼の思索の持ち味を理解することは、果たして可能であろうか。また、そもそも「生き方」というものを具体的な個人と切り離れた形で定式化することは、可能であろうか。いずれにしても、キェ

---

\*1 本稿は、2015 年度に開催されたキェルケゴール協会第 16 回学術大会における研究発表、「キェルケゴールとマックス＝ピカート—決断をめぐる考察—」に修正と加筆を加えたものである。

ルケゴールが提示した生き方を単なる目標や手本のようなものとして扱うことは、彼の思索の持ち味を損なうことにつながるように思われる。

こうした疑問点と向き合うにあたって、本稿では19世紀の後半から20世紀の中ごろにかけて、ドイツおよびスイスで活動したマックス・ピカート (Max Picard, 1888-1965) の思索を主な手掛かりとしたい。彼がことさらにキェルケゴールから受けた影響について語ることは少ないが、その著作群における記述には、彼がキェルケゴールの思索に対して何らかの立場を表明していたであろうことをうかがわせるものがある。例えばピカートは、『人間とその顔』*Die Grenzen der Physiognomik* (1937) という著作において、「美 (Schönheit) ではなく善意 (Güte) が、ひとりの人間の顔のなかにあらわれる決断 (Entscheidung) のしるしである」(PHY, 157) \*2と発言しているのだが、ここでいうところの決断とは、「神へと決断すること」、すなわち、信仰に向かって自らのかじ取りを行うことを意味している。してみるとこの発言は、「信仰とはまさに主体性の最高の情熱にほかならぬ」\*3としたうえで、神の恩恵として与えられる信仰に対して、人間がいかにして自らの意志で応えていくことが出来るのかを追い求める、キェルケゴールの思索との親近性を有しているようにも思われる。これに限らず、ピカートの著作群においては、キェルケゴールの著作に対する返答とも解釈できるような記述が散見されるのである。本稿の目的は、そうした記述の内容の検討をもとに、ピカートがキェルケゴールの思索をどのように受け取り、どのような形で自身の思索の糧にしてきたのかを明らかにすることである。また、そのことを通して、現代においてキェルケゴールの思索と関わる際の、一つの視点を見出したいと思う。

\*2 Picard, Max. *Die Grenzen der Physiognomik*, Eugen Rentsch Verlag, Erlenbach-Zürich, 1937. マックス・ピカート著、佐野利勝訳『人間とその顔』、みすず書房、1959年。本稿における略記号は(PHY)とする。以下、ピカートの著作からの引用は、(略記号、ドイツ語原著のページ数)という形で示す。また、原著においてイタリックで表記されている箇所は、既存の日本語訳にならい、傍点で強調する。

\*3 キェルケゴール著、杉山好・小川圭治訳『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき(上)』(キェルケゴール著作集7巻)、白水社、1968年、238頁。

## ピカートについて

ピカートの思索におけるキェルケゴールの影響を検討していくにあたり、まずはピカート自身の経歴や知的関心がいかなるものであったのかを、ごく簡単に見ておこう。

マックス・ピカートは1888年6月3日、スイスとの国境に近いドイツ南西部、バーデン (Baden、現：バーデン＝ヴュルテンベルク州) のショッフハイム (Schopfheim) にユダヤ系スイス人を両親として生まれた。祖父はユダヤ教の高名な聖職者 (ラビ、独：Rabbi) であり、このことはピカートにとって長年の誇りであったという。1906年、ピカートは大学進学のための資格試験、アビトゥーア (Abitur) を通過。翌1907年からはフライブルク大学、キール大学、ベルリン大学、ミュンヘン大学で医学を修めた。梅毒と麻痺に関する論文で学位を取得したのち、ハイデルベルク大学の助手となるが、ここでリックルト (Heinrich John Rickert, 1863-1936) やトレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) の講義に触れ、哲学的な問いに対する関心を深めていった。1912年からはフランクフルトやベルリンなど、各地の病院で勤務し、その後ミュンヘンで開業するも、当時の医学に対するピカートの立場は必ずしも肯定的なものではなく、むしろその傾向が機械的、実証主義的過ぎるとして危惧の念を抱いてさえいた\*4。そのような背景もあってか、1918年には医業を止め、病気がちであった妻の健康のことも考慮し、スイス南部のティチーノ州 (独：Tessin 伊：Ticino) ルガーノ湖畔 (Lugano) に移住。フリーの文筆家として本格的に活動を開始した (30歳)。またリルケ (Rainer Maria Rilke, 1875-1926) やカスナー (Rudolf Kassner, 1873-1959) といった、当時の文学、詩学界における友人たちとの交流が始まったのもこの頃のことであった。

1927年、ピカートは妻マルガレーテに先立たれ、これ以降カトリックに改宗している (39歳)。彼はこの後もスイスで暮らし続け、77歳で他界するまで、雑誌や新聞への寄稿をはじめとして多様な執筆活動に従事した。50年近い活動

---

\*4 参照：坂田徳男「虚偽の核」(『人文研究』第10巻6号)、大阪市立大学、1959年、525頁。ごく簡単な記述ではあるものの、本論文において、ピカートが優れた精神科医であったことが紹介されている。

期間に対し、書籍の形にまとめられた作品の数はそれほど多くはなく、小さなものも含めて20程度である。本稿では、彼の手掛けた著作のうち、おおよそ中期から後期（1930～50年代後半）のものを中心にとりあげていくことにする。

## ピカートの著作におけるキェルケゴールの影響

ここからは、ピカートの著作においてキェルケゴールの思索がどのような形でとらえられているのかを実際に見ていくことにしよう。まず以下に示すのは、ピカートの手掛けた『神よりの逃走』*Die Flucht vor Gott*（1934）および、『沈黙の世界』*Die Welt des Schweigens*（1948）からの引用文である。

### （引用文①）

ドストエフスキー、キェルケゴール、パスカルが神への情熱によって動かされ、ただ神ゆえにのみ情熱を燃え立てさせたのに反して、現代人たちは逃走の世界の中であって、この情熱によって常に一つの場所から他の場所へと投げ飛ばしてもらうだけなのである。ドストエフスキー、パスカル、キェルケゴールは彼らの情熱に殉じた……ところが現代人たちはその情熱でもって策動するだけである。（GOTT, 53）\*<sup>5</sup>

### （引用文②）

今日の実存主義哲学（Existentialphilosophie）は、言葉および事物の機械的な作業過程から脱出しようとする一つの試みである。人間は自己を無の中へ投げ込む。〈中略〉しかし、一つの新しき発端のまえに立ち得る人間は決してそこにはいない。そのような人間は、決して無の中にはいないのである。人間は無の中では解体してしまう。だから、実存主義哲学の、「不安（Angst）」、「憂慮（Sorge）」、「死（Tod）」などというカテゴリーによってふたたび根源的な事物に近づき得るような人格は、決してそこには

\*<sup>5</sup> Picard, Max. *Die Flucht vor Gott*, Eugen Rentsch Verlag, Erlenbach-Zürich, 1934. マックス・ピカート著、坂田徳男・佐野利勝・森口美都男訳『神よりの逃走』、みすず書房、1963年。本稿における略記号は（GOTT）とする。

ない。(SCH,201) \*6

(引用文①)では、キェルケゴールが神に対して情熱的に向かった人物として、どちらかといえば肯定的な形でとりあげられている。対照的に(引用文②)では、「ピカートと同時代の」実存主義哲学の基盤に対する、彼の疑念が表明されている。明確な人名こそ挙げられてはいないものの、ここでピカートはハイデガーやサルトルの哲学を念頭に置いているように思われる。周知のように、一口に「実存主義哲学」といっても、その分類の基準は厳密なものではなく、見方によっては上記の(引用文①)にもあるドストエフスキーやパスカルに加え、ニーチェなども「先駆者」としてこの分類の中に組み込まれることがある。この語は非常に広い範囲を包括し得るものであると言えよう。ただ、そうした概観的な分類の仕方を見慣れている我々からしてみると、ピカートの行っているような区別は、一見しただけではその意図が分かりづらい。例えば「不安」という要素は、なるほどハイデガーの思索においても重視されていたが、そもそもキェルケゴールがそれに先立って『不安の概念』を著わし、「罪」という視点をもとに、この「不安」という要素について詳細に論じていたのではなかったか。ピカートの主張から判断するならば、彼の生きた時代における「不安」は、キェルケゴールの語ったものとは異なっているということになろう。それならば、自らの同時代人たちの思索とキェルケゴールの思索との相違点を、果たしてピカートはどのように捉えていたのであろうか。彼自身の著作における主張を通して考えてみたい。

## ピカートの視点—信仰と不安

信仰や不安というものに対して、ピカートがとりわけ多くの主張を展開した著作としては、『神よりの逃走』を挙げることが出来る。ピカートは本書において、「信仰の世界 (die Welt des Glaubens)」に対するものとしての「逃走の

---

\*6 Picard, Max. *Die Welt des Schweigens*, Eugen Rentsch Verlag, Erlenbach-Zürich, 1948. マックス・ピカート著、佐野利勝訳『沈黙の世界』、みすず書房、1964年。本稿における略記号は(SCH)とする。

世界 (die Welt der Flucht)」をその主要な題材とした。ピカートによれば、「いつの時代にも人間は神から逃走してきた」(GOTT, 11) のだが、ピカートの生きた時代における逃走と、それ以前の時代における逃走との間には相違点があるのだという。すなわち、従来の逃走は信仰の世界から離脱しようとする個人が、あくまで単独の人間として行うものであって、それによって信仰の「客観的な世界 (objektive Welt)」までもが揺るがされることはなかった。仮に一人の人間が信仰から離脱したとしても、信仰というものの現実味が人間の支えとなるような世界観そのものは、依然として存続することが出来たのである。この場合、逃走とは個人の「決断 (Entscheidung)」を要する特別な行為であった。

一方、ピカートの生きた時代においては状況がまったく逆転しており、それまで確乎として存在していた信仰の世界は破壊され、それに代わって逃走の世界こそが客観的に存在しているのだという。ピカートは、「逃走の圏外には一人の人間も存在してはいないように見える。人間は、もっぱら逃走に参加するその程度に応じて存在しているに過ぎない」(GOTT, 11) と語る。逃走というものがそれほどまでに人間に浸透しきっているのが、ピカートの見つめる現代という時代の特徴なのである。この場合、信仰を望む個人は、かつての逃走に際してのように、ある特別な行為として信仰の中に身を投じる必要がある。今や神との結びつきを絶とうとすることではなく、神との結びつきを実感することの方が「特別な行為」になっているのである。これに関してピカートは、「逃走の世界には信仰は存在しない。何故なら、あらゆることが可能な場合には、われわれは信ずる必要はないからである。神は一つの可能性に格下げされたのだ」(GOTT, 26) と、「可能性 (Möglichkeit)」という言葉を用いて説明を試みている。また、これに加えて逃走の世界を「必然性 (Notwendigkeit) の世界ではなく可能性の世界」(GOTT, 22) であるとも表現している。神は確乎たるもの、必然的なものの座から引きずりおろされたというのである。「信仰の世界」が「必然性の世界」として、友情や愛、人の生き死にといったあらゆる事象に一つの出来事としての確かさを与え、厳粛なものにするのとは対照的に、「逃走の世界」の中には確実な事象がない。ピカートは、「この世界のなか

に存在しているものは何ひとつないのだ。愛も、友情も、教えも急速に作り出される。しかし、そのどれ一つをとってみても全的なものではなく、友情や誠実さなどのほんの断片であるに過ぎない」(GOTT, 73) と語る。逃走の世界においても人間は愛や友情を求める。というよりも、むしろ逃走の世界に身を置いているからこそ、人間は毎瞬間ごとに、自分のそばに愛や友情がとどまっているかどうかを確認せずにはいられないのである。逃走の世界における愛や友情は、姿を現わしたかと思えば次の瞬間には消えてしまう不確かなものである。あるいは、その場限りの使い捨てのものと言ってもよいかも知れない。人間はその都度、愛や友情の存在を確認することから始めなければならないのである。そしてこのようにして逃走の世界、すなわち可能性の世界の中で生きる人間は、出来るだけ多くの可能性（選択肢）を手もとに置いておこうと躍りになっている。自分の人生において何が必要で、何が必要でないかを、もはや自分自身では決めることが出来ない。それならば、とにかく色々な可能性をあらかじめかき集めておこう、というわけである。そして、もしそれが必要でないことが分かれば、その時点で別の可能性と交換することも出来るのである。

逃走の世界は可能性の世界であるとピカートは主張するが、ここでいうところの「可能性 (Möglichkeit)」とは、人間が自分自身で決断し、ある一つの物事を選び取る能力を有していることを意味しているのでは決してない。むしろその逆で、逃走の世界の人間はもはや決断の能力を有してはいないということの意味しているのである。ある人が何かを「選び取った」としても、それはいくつもある可能性のうちの一つに触れたというだけのことに過ぎない。次の瞬間には全く別の可能性（選択肢）が取って代わることも考えられ得るのである。したがって、ここには物事に対する真剣さが無い。人間の生活は「たまたまこうなった」の繰り返しでしかないのである。そのようにして人間が可能性の波に身をまかせきっている以上、責任を負うという行為は意味をなさないのである。キェルケゴールが『死に至る病』で提示したような、可能性と必然性の総合としての人間の姿は、ここにはない。人間は可能性一辺倒の世界に身を置いているというのが、ピカートの理解なのである。

果たして「逃走」が客観的な世界として存在するとは、いかなる状況であら

うか。ピカートによれば、信仰の世界の人間は逃走を一つの「罪 (Sünde)」、他ならぬ自分自身によって直接なされた罪であると自覚していた。しかしながら、逃走の世界においては、逃走は個々人から解き放たれ、それ自体独立の、誰にも属さない匿名のものとして存在している。これに関してピカートは、「信仰の世界において人間の内部で生じたあらゆる対決、つまり、自分は逃走すべきであるか否かというあらゆる内的な動揺 (innere Hin und Her) は、今では外的な動揺 (äußeres Hin und Her)、逃走の外部的な力関係に置きかえられてしまっている。逃走が自律的になったのだ」(GOTT, 12) と語る。逃走は人間なしでも存続しうる。それどころか、今や逃走によって人間が動かされているのである。ピカートはこの状況を、逃走が「工業化されている (industriert)」(GOTT, 13) のだとも表現した。一人一人が神に背くことを決断する以前に、社会全体が、信仰や神について語ることが冗談めいたこととして捉えられてしまうような状況を準備しているということである。もはや一人一人の人間が逃走をしなくても、逃走そのものが自動的に働いてくれるのである。

ここまでピカートの著作における主張をもとに、信仰というものに対する彼の視点がいかなるものであったのかを見てきた。注目したいのは、ピカートにおいては「可能性」というものが、「いずれを選んでも大差のないもの」、「それぞれに質的な違いをもたない等価のもの」といった意味で捉えられているという点である。我々はここにおいて、ピカートが身を置く時代とキェルケゴールが生きた時代との相違点を見出すことが出来るのではないか。『不安の概念』には、「不安によって形成される者は、可能性によって形成されるのである。そして可能性によって人間形成される者であってはじめて、かれの無限性に従って形成されるのである」\*7との記述がある。本書によれば、「○○が」と言えるような明確な対象と結びついていないという点において、「不安」は「恐怖」とは異なっている。この対象との結びつきの無さ、「なんとなく」という感じこそが、まさに不安の特徴であるのだが、これは、自由の可能性のみが与

\*7 キェルケゴール著、氷上英廣訳『不安の概念』(キェルケゴール著作集 10 巻)、白水社、1964 年、231 頁。



えられていて現実性が見えないという、「無」を前にした「自由の眩暈」\*8であるとも表現されている。不安とは、可能性が現実性に移行するにあたってこれを手助けする中間規定であり\*9、その意味においては人間に飛躍のきっかけを与え得るものである。しかしながら、そうした不安のはたらきは、ある人が信仰を持ち、可能性に対して誠実である時、初めてその力を発揮し得るものである\*10。こうした人間は多くの可能性の波にもまれながらも、その都度神に向かうことを決断することで、自らの信仰を鍛えていく。これに対し、ピカートの主張した逃走の世界、すなわち可能性の世界においては、人間はそもそも罪の意識を持っておらず、他ならぬ神すら多くの可能性のうちの一つに格下げされている。この場合、もはや人間は可能性に対面することを通して、自らの信仰を見つめなおしたりはしない。彼にとっては可能性こそが全てであり、それを押しつけてでも獲得すべきもの、かけがえのないものがあるというのは、彼には思いもよらないことなのである。

それでは、こうした世界に身を置く人間は、自らが行う決断という行為の責任から解放されて、悠々と暮らしているのであろうか。確かにピカートは、「自分が神から逃走したことを忘れてしまった人間、……逃走しながら、自分が逃げているというそのことを、いわんや誰から逃げているかを知りもしない人間、そのような人間は不安を抱きはしない」(GOTT, 79)と語ってはいるが、それは決して、人間が自らを取り巻く様々なしがらみから解放されているからではない。「むしろ不安が彼を所有しているのである」(GOTT, 79)。ピカートの理解においては、不安は現状とは異なる局面へと飛躍するきっかけにはならない。というのも、人間はもはや自分が不安の中にいるということに気付くことが出来ないからである。ピカートによれば、現代という時代は可能性によって埋め尽くされており、人間は次の瞬間に自分に何が起ころうともよいように、あらゆる物事に対して同様の対応をとるべく身構えている。ある可能性への対応が上手くいくことはもちろんあるが、次にやってくる可能性への対応が同様

---

\*8 同書、91 頁。

\*9 同書、73 頁。

\*10 同書、233 頁。

に上手くいくとは限らない。毎瞬間ごとがこの対応の繰り返しなのである。そのため、可能性の世界、すなわち逃走の世界には人間が心を落ち着けるための「間」がない。ここでは、せかせかと動き続けることが人間の基本的なあり方として浸透している。いつ、何が起こるか分からないという漠然とした不安の構造がまずあって、その中に人間が入っていくのである。ことさらに不安に悩まされることがなくても、人間が生きているということの中に、すでに不安が組み込まれている。人間は、息をするのと同じような具合で、不安の中に身を置いているのである。ピカートが指摘する問題の深刻さはこの点にある。仮にある人が、自分は逃走の世界の不安の中にいることに気付いたとしても、これほど自分の生と密接に結びついた構造から抜け出すことが出来ると考えるであろうか。また実際、逃走の世界から抜け出すための手段を、同じ逃走の世界の中の物事に求めることは困難であるように思われる。

## 人間の自由と決断

ここまでは「不安」という要素を中心にとりあげ、これを通して現代に対するピカートの視点がいかなるものであったのかを見てきた。一見したところ、彼は自らの主張を通して、現代人がいかに絶望的な状況にあるのかを強調しているかのようでもある。というのも、ピカートの主張は、それに触れたものに厭世的な雰囲気を感じさせるほどの徹底性を備えているからである。果たしてピカートにとって、現代という時代は人間の腐敗の極致なのであろうか。それとも彼は、現状を打開し得る何らかの要素について、考えを巡らせていたのであろうか。仮にそうだとすれば、例えば、いわゆる弁証法神学 (dialektische Theologie) のようなものは、ピカートにおいてはどのように捉えられているのであろうか。

### (引用文③)

弁証法的神学は、人間を絶え間なく警報状態のなかに置くための一つの手段に他ならない。弁証法神学においては、向うには (dort) 限りなく偉大な神があり、こちらには (hier) 限りなく小さい人間がある〈中略〉もし

も造物主 (Schöpfer) と被造物 (Geschöpf) のあいだのこの緊張が本当に存在するのなら、世界のなかのあらゆる他のものも互いに緊張状態にあり、一つのものは常に他のものと競りあうことであろう。(GOTT, 81)

(引用文④)

弁証法的神学は、神の絶対性のまゝに個人を対置し、明瞭にすることによって、主体をふたたび明確に限界づけようとする一つの試みである。〈中略〉しかし、それは単に外面的な、地形測量学的な記号づけでしかないように私には思われる。なるほど、キェルケゴールにおいても個人が絶対唯一の神に対面していた、しかし、人間は括弧の中に孤立化されて (isolieren)、この緊張の中に閉じこめられていたのではなかった。人間は依然として世界の一部であった。そしてキェルケゴールにおいては、この世界のただ中で、この世界の充溢のなかで、人間は神に対面していたのである。(FREI, 19) \*11

ここで注目したいのは、すでに見た二つの引用文の場合と同じように、ピカートが、彼の生きた時代における弁証法神学と、キェルケゴールの神に対する姿勢との間に相違を認めているという点である。今日の我々からしてみれば、実存主義にしろ、弁証法神学にしろ、その「創始者」がキェルケゴールであるという漠然としたイメージがあるため、彼と後年の思想家たちとを安易に結びつけてしまいがちだが、ピカートにおいては区別がなされているのである\*12。果たしてこの区別は、いかなる観点に基づくものであろうか。以下の引用文はその探求の手掛かりとなるように思われる。

\*11 Picard, Max. *Ist Freiheit heute überhaupt möglich?*, Fulche-Verlag, Hamburg, 1955. マックス・ピカート著、佐野利勝訳『騒音とアトム化の世界』収録の「現代にも自由は可能か」、みすず書房、1971年。本稿における略記号は (FREI) とする。

\*12 現代における弁証法神学そのものをピカートが忌避していたというわけではない。上記の (引用文④) の直後の箇所、「だが、こう言っても、弁証法的神学のなかには、人間を現代の普遍的混合から救い出そうとする努力はたしかに存在しているのである」(FREI, 19) とも言及している。

## (引用文⑤)

今日、およそ自由は可能であろうか。キリスト者にとってはキリスト信仰へと決断することが常に可能である、と人は言い、或いはまた、カントに従って、人間は外部の原因に依存することのない自由な選択を通じて、道徳律のもとに立つことが出来る、と言われている。理念<sup>イデー</sup>としての人間ならそのようなことも出来るだろう。しかし、血肉をそなえた現実の人間にはそうはゆかない。(FREI, 5)

## (引用文⑥)

つまり、自由のなかにあって決断をくださべき主体が、ないのである。いや、万一主体が明瞭に存在しているとしても、……人間がそれに対して決断し得るような明確な対象がないであろう。もろもろの対象はこのらず入りまじりあっている。(FREI, 9-10)

ピカートは、人間が自らの自由をもとに、あくまで自らが身を置く世界の一員として決断を行うことに重点を置いているようである。そしてこの点は、ピカートの時代の弁証法神学と、キェルケゴールの神に対する姿勢とを区別する際の基準にもなっていると考えられる。しかしながら、ここに示した引用文⑤と⑥は、むしろ現実においてそうした主体的決断を行うことの困難さを語っているようでもある。これらはいずれもピカートの活動においては後期にあたる時期の著作、『現代にも自由は可能か』*Ist Freiheit heute überhaupt möglich?* (1955) から抜き出されたものだが、このような見方や主張そのものは、彼の活動のごく初期の段階から、すでにその萌芽が存在していたのだということを指摘しておきたい。ピカートは、ある時期を境に特別な用語や新しい手法を用い始めたりすることがきわめて少なかった。彼はそれまでの自身の主張を切り捨てたり、時には踏み台にしたりして思索の内容を飛躍させていくというよりは、時間をかけてももとの問題意識を醸成させていく人物であったように思われる。今、二度の大戦を経たピカートが描写しているのは、決断という行為の起点となるところの「主体 (Subject)」と、それが向かっていくべき「事物

(Ding)」、そして、そうした行為の足場となる「世界 (Welt)」が、いずれもその支えを持っていないという不確かな状況である\*<sup>13</sup>。何もかもが入り混じっていて、確かなものを見出せないというこの状況は、ピカートの各著作においてしばしば言及される、「連関性の喪失 (Zusammenhangslosigkeit)」という状況に照応するものであると考えられる。これらの主張に共通する内容をごく簡単にまとめるならば、人間はあらゆるものに対して秩序だった関係性を見出すことが出来ず、行き当たりばったりの生活を送っているだけでなく、そうした現状に気付くきっかけすらも失いつつある、ということになるのか。ピカートはこの状況を、人間がそれをもとにして自らを律していけるような「中心 (Zentrum)」を持っていないことに起因するものであると考えている。ピカートは現代という時代が抱える病理を、この「確乎たるものの無さ」のうちに見出していたように思われる。そして、彼の著作においては、とりもなおさず「神」が、この確乎たるものの代表としてとりあげられてきたのであった。ピカートは、「神との連関」を保つこと、すなわち信仰に向かって決断することが、人間をこの状況から脱却させ得ると考えていたのである。

しかしながら、仮にピカートの語るように、今や人間が連関性を喪失し、決断の能力を有していないとしても、果たしてそれは危機的な状況として理解され得るであろうか。たとえ「神に対して」ではなくても、今日の日常生活において人間が絶えず「決断」を迫られているかといえば、恐らくそうではない。否、そもそもいつの時代においても、決断とは非日常的な行為であったはずである。ピカートの語る決断とは、二つの選択肢のうち、いずれを選んでも全く違った結果につながるような状況のもと、自らの意志で一方のものを選び取る

\*<sup>13</sup> こうした現状を描写しようとする試みは、ピカートの手掛けた著作群に通底する特徴であると言える。多くの記述があるが、例えばその内の一つとして、「今日の人間は、もはやそれに相対すべき対象を持ってはいない。主体と客体とはたがいに混合してしまっている。ちょうど、現代の抽象絵画の作品の場合と同様である。この抽象絵画も、もはや一つの絵として世界に対してもないし、世界のうえに立っているのでもなく、実はこの混合した世界の一部なのだ。人間は対象と混合した、——対象へと水平化 (nivellieren) されてしまったのである」(FREI, 7) というピカートの発言を挙げることが出来る。また、政治論としての側面を強調して読まれることの多い『われわれ自身のなかのヒトラー』(1946) は、こうした描写にとりわけ富んでいるという点から見ても、やはり注目に値する著作である。

ことであった。それは、「神に向かうのか、それとも背くのか」というような、人生の節目となる一つの大きな出来事である。しかしながら、こうした決断とは縁遠い生活を、模範的な生活から外れた低次の生活などと切り捨てることは出来まい。それはむしろ、「普通の人」の生活であろう。普通に暮らす普通の人々が、決断に際して初めて、今の自分とは違ったあり方もあることに思い至るのである。問題なのは、そうした転換の契機が、今や人間にとってあまりにも稀薄なものになっているということである。こうした状況においては、ピカートが語ったような神と人との素朴で直接的な連関は、単なる説教のきまり文句としてしか受け止められないのではないか。また、神との連関を見失ったことによって乱れた秩序が、神との連関を取り戻すことによって回復するという主張は、すでに信仰から離脱した人間や、そもそも信仰を持っていない人間にとって、どれほどの迫真性を持つか疑わしい。そしてこのことは、他ならぬピカート自身にとっても大きな問題であった。

(引用文⑦)

神との連関によって人間自身が再び連関性を有するものとなるべきだ、とは言うにたやすいことである。たしかに、神は人間を崩壊から守りささえる中心である。しかし、どうして連関性は恢復され得るであろうか？  
(PER, 38) \*<sup>14</sup>

我々はここにおいて、ピカートが信仰を語るだけでなく、信仰を生きた人間であったことを垣間見る。すでに指摘したように、「神との連関」は、ピカートの著作において繰り返し言及がなされてきたものであり、彼の思索の根幹をなすものの一つであると言えよう。思うに、この表現は人間を信仰へと立ち返らせるための安易な標語として用いられていたのではない。この「神との連関」という表現を額面通りに受け取り、「ピカートはその著作の中で、人間が

\*<sup>14</sup> Picard, Max. *Die Atomisierung der Person*, Fulche-Verlag, Hamburg, 1958. マックス・ピカート著、佐野利勝訳『騒音とアトム化の世界』収録の「人格のアトム化」、みすず書房、1971年。本稿における略記号は (PER) とする。

再び信仰心を持つことの重要性を説いているのだ」などと単純に解釈してしまえば、彼の思索の持ち味は失われてしまうように思われる。というのも、そもそもピカートの思索の前提は、人間がすでに神との連関を喪失してしまったこと、すなわち、信仰ではなく不信仰に現実味を感じる人間の方が多数派になったことだからである。「神との連関」という表現は、そうした現状の中でも信仰を保とうとする、ピカート自身の決意の込められたものとして受けとられるべきではないか。彼の主張のうちに、同時代人に対する「批判」や「教訓」ではなく、彼自身を含めた現代人という視点からの「反省」の性格を見出した時、彼の手掛けた著作の持ち味が生きてくるように思われる。その実、『われわれの自身のなかのヒトラー』というタイトルに象徴されるように、ピカートは著作の執筆に際して「われわれ (wir)」という人称を多く用いるのだが、そのようにして彼は、自身の著作の中で描写した同時代人たちと同じ立場に身を置き、そこから問題を考えていくことを基本姿勢としたのである。

ピカートが信仰を生きる人間であったとすれば、彼の拠り所となっていたものは何であろうか。信仰というものの現実味が薄れていく状況において、なお「神との連関」を語ることが出来たのは、なぜであろうか。その理由の一つとしては、彼が「決断の行為それ自体のうちに救いがある」と考えていた (FREI, 20) ことを挙げられるのではないか。

(引用文⑧)

神は人間になろうと決断したのだ。神は人間のために、まゝもって決断したのだ。そうすることによって、神は、人間が神へと決断するのを容易ならしめたのである。(PHY, 164)

(引用文⑨)

もしも決断があらかじめ人間にあたえられていないとすれば、人間には決断の個々の行為をなす能力はないであろう。まことに、人間がみずから決断することが出来るまえに、神が人間のために決断したのである。決断は世界の構造のなかに織り込まれているのだ。このあらかじめ与えられてい

る自由がなければ、個人の自由の行為は、いわば自己にとり必要不可欠の世界を失って何処かの博物館に迷いこんだ一個の美術品のようなものであろう。(FREI, 17)

ピカートは、人間の持つ決断の能力が神に端を発するものであると考えている。彼によれば、複数の可能性を前にした人間が、ある一つのものに対して決然と向かい合った時、一つの「剰余<sup>プラス</sup> (Plus)」が発生するのだという。ピカートはこの剰余というものを、人間が自己自身に与えることのできる恩寵、すなわち、「下からの恩寵 (die Gnade von unten)」(FREI, 22) と呼んだ。神的なものにあずかる能力を発揮することが、世界に対して秩序を与えることにつながるというのである\*<sup>15</sup>。また、この剰余は瞬間的なものではなく、持続的に、広範囲に影響を及ぼすのだという。

(引用文⑩)

絶え間なく新しい決断によってもろもろの事物が秩序づけられる必要はない。ただ一つの決断のなかに含まれているプラスによって、おのずから正しい秩序は継続される。だから、たとえばキェルケゴールにおけるような、継続的決断の息づまるような緊張は解消するのである。人間はこのプラスによって暫くのあいだ、ひとりでの、受動的に、自由の領域にたもたれる。これが、自由から生ずる恵みなのだ。そして行為を遂行した当の個人だけではなく、他の人々もこのプラスによって支えられるのである。(FREI, 21-22)

ピカート自身が『神よりの逃走』などを通して語ったように、現代において人間が決断を行うことは、それまでの時代においてよりもなお、稀なことであろう。いわんや神に対しての決断など、見出されるべくもないほどである。ピ

\*<sup>15</sup> 人間は決断の結果、悪をなすこともある。これに関してピカートは、「悪への決断によっては、プラスが生じないというだけではなく、マイナス (Minus) が発生する」(FREI, 22) と語っている。



カートは自身が身を置く時代の信仰について、以下のように語っている。

(引用文⑩)

……信仰者がこんなに貧しいことはかつてなかった。しかし、信仰者がこんなに誇りたかかったこともかつてない。なぜなら、彼は毎瞬間ごとに信仰をふたたび獲得するのだからである。〈中略〉誰かひとり人間がこのようなやり方で信仰しながら生きることを為し遂げるならば、神は彼を憐れみたまうであろう。(GOTT, 33)

現代においても、信仰を守るために格闘する「誰か」がいれば、その決断の行為によって生じたプラスによって、あらゆるものの秩序が回復され得る。ピカートにとって、これは単なる慰めにとどまらない、確信のこもった主張であろう。一人の人間が行う決断が、他の人々をも護り得るのだとすれば、引用文③～⑥で見たような、「世界の中で決断すること」へのピカートのこだわりも、納得のいくものとなるのではないか。信仰者は孤独を抱えた「単独者 (Einzelne)」ではあるものの、その影響を通して他の人々ともつながり得る。その確信が、長年に渡ってピカートの信仰を支えていたと言えるのではないか。

## おわりに

我々はピカートの洞察をどのように解釈すべきであろうか。今回見てきたように、ピカートは神や信仰について言及した著作をいくつも発表しており、彼の思索の根底に一貫して宗教的な要素が息づいていたことに関しては、疑いの余地がない。したがってまた、「信仰」という文脈からの解釈は、確かに我々に何らかの視点を与えてくれるかも知れない。しかしながら、少なくともピカートが長年キリスト教徒として生きたということのみを理由に、彼の著作を教訓や名言のようなものとして読み解こうとするのは実りの多いことではない。我々は、ピカート自身が神との関わり方を終生考え続けていたということをお忘れてはならない。仮にピカートが「信仰者」であるとすれば、我々は

彼を、神との確乎たる結びつきによって護られた「信仰の世界」の信仰者としてではなく、毎瞬間ごとに信仰を抱きとめなおそうと苦闘する「逃走の世界」の信仰者として解釈するのが適切なのではないか。

ピカートはキェルケゴールの思索のうちに、現代においては希薄となった神への情熱と、決断を行う人間の果敢さを見出していたように思われる。ピカートの著作における記述を通して考えるなら、現代という時代に生きる我々にとって、キェルケゴールが提示したように、たった一人、神に向かって決断を繰り返しながら生きることは、困難であろう。多くの人にとって、それは自分とは遠い世界の出来事であって、話として理解することは出来ても、それを実践出来るとは思ってもよらないのではないか。しかしながら、ピカートが提示した「ある人の決断の行為によって生じる剰余」という視点は、そんな我々にとってもなお、支えとなり得るものではないか。この視点を介することによって、キェルケゴールの思索をより身近に、より人間味のこもった形で捉えることが可能となるように思われる。

ピカートの思索は、キェルケゴールと我々との間隙を埋め得るものとして、我々の生きる時代においてこそ注目に値するものではないか。